

退職後に巡るヨーロッパでの仕事の軌跡

橋本 直



ウイーンで日本酒を一杯

1. はじめに

私は 1977 年に(株)日立製作所日立工場に入社し、2013 年 3 月末に 60 歳で 36 年間の会社生活にピリオドを打ちました。

ヨーロッパと関係する仕事が多く、30 歳の時から毎年平均 10 回の出張が退職時まで続きました。育児を妻に任せて出張に明け暮れていましたので「退職したらいくらでもヨーロッパに連れて行ってやるよ。」が口癖で言い逃れをしていました。55 歳になり子供の手が離れると妻の「約束は守ってよ。」が始まりました。

30 年前のヨーロッパ出張の状況を、現在の観光旅行と比較しながらご紹介したいと思います。

2. 空港と飛行ルート

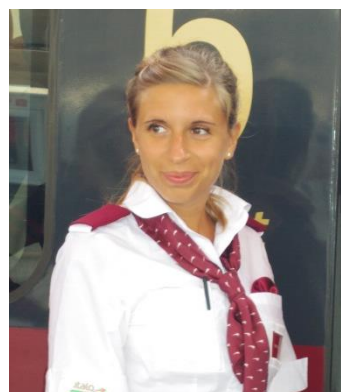
最初の海外出張は 1982 年 30 歳の時にイタリア三週間でした。新日本製鐵(株)君津製鐵所をモデルにして作られた Italsider 社 Taranto 製鐵所の設備改造の商談でした。現在は使用されていない京成電鉄・成田空港駅からバスで検問所を何か所も経て、現在の第一ターミナルから出発です。当時のヨーロッパ便は夜出発で、アラスカのアンカレジを経由します。アンカレジまで 7 時間、給油で 2 時間、デンマーク・コペンハーゲンまで北極ルートを 9 時間、また給油で 1 時間、ローマまで 3 時間、合計 22 時間です。到着は現地時間の午前 11 時頃でした。到着すると現地の商社の方と昼食、滞在中の仕事の打合せ、夕食と続き、解放されるのは夜 10

時。自宅を出てから 36 時間後にやっとベッドで寝ることができました。

現在は羽田空港を昼前後に出発、シベリア上空を飛んで現地時間の夕方 4 時か 5 時にはヨーロッパの主要空港に着きます。時差はあるものの自宅を出てから 20 時間後には高いびき。楽になりました。

3. 新幹線と高速道路

退職直前の妻とのドイツ旅行ではフランクフルト空港からデュッセルドルフまでドイツ国鉄の ICE(Inter City Express) を利用し 1 時間半でした。退職後のイタリア旅行ではフェラーリ特急 Italo でフィレンツェからナポリまで 2 時間半でした。30 年前からは信じられない早さです。



フェラーリ特急 Italo と車掌さん
(車体、スカーフはフェラーリ色の赤)

スペインでは高速道路もずいぶん整備されてきました。33 歳前後の時に英領ジブラルタルの先の Algeciras 市にあるステレンス鋼板メーカーの ACERINOX 社

への出張が続きました。太陽の海岸と訳される Costa del Sol(コスタ・デル・ソール)という地中海沿いの海岸にあるお客さんです。成田・香港・マドリッドと乗り継ぎ、国内線でマラガに行き、タクシーで海岸沿いを3時間走るきつい出張でした。昨年のスペイン旅行では同じルートを通ったのですが、山一つ越えた内陸を高速道路で1時間でした。あっけないものでした。尚、英領ジブラルタルですが、何度かロンドンから飛んだことがあります。狭い土地ゆえですが、飛行機の滑走路と一般道路が直角に交差しており、飛行機の離着陸の時だけ道路に遮断機が下りて閉鎖される珍しい空港です。飛行機を降りると歩いて国境を越え、スペイン側でタクシーに乗ります。

4. ヨーロッパの風景

空港に着陸するとき、バスや車で移動するとき、30年前にはなかった風景を各地で目にします。風力発電機です。

50歳代の9年間、私も風力発電事業に携わりました。ドイツの ENERCON 社から風力発電機を輸入し、日本で風力発電所を建設する仕事です。9年間で160台、25万kWの風力発電所を建設しました。退職前に引退挨拶のため、妻を連れて ENERCON 社を訪問し、地上130mの6,000kW風車の頂上で写真を撮りました。



昨年のスペイン旅行でラ・マンチャ地方に行き風力発電機の原型である粉ひき用の風車の内部構造を見学しましたが、機械的な原理は全く同じでした。



ラ・マンチャの風車群

5. 関係会社の変貌

最初の海外出張から30年余を経て、海外旅行のついでに、昔お付き合いした会社の場所を訪れることも楽しみの一つです。さすがに「こんにちは」と入るわけにもいかないで、外から眺めることが多いのですが、時の流れを感じます。

最初のイタリア出張でお世話になった大倉商事(株)が入っていたミラノ市の建物は、高級スポーツカーのフェラーリ・ショップに、フィンランド向けの製鉄プラントを共同受注したドイツ・デュッセルドルフ市のMDS (Mannesmann Demag Sack) 社は競争相手であった SMS (Schloemann Siemag) 社に吸収され、その設計オフィスに変わっていました。

MDS 社への出張では笑い話の思い出があります。ホテルからタクシーに乗って住所を言うのですが、どうしても通じません。Schwan Strasse(白鳥通り)ですが、私の発音は「シュバン・ストラッセ」になります。正しい発音を文字にするのは難しいのですが、敢えて書けば「シュヴァーン・ストラッセ」。タクシーを降りるまで「もう一回言ってみろ」と運転手に何回も練習させられました。(完)